

## 小原先生の思い出：酒と旅と"江戸ッ子"

著者	山田 道弘
雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	128-131
発行年	1980-02-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019288">http://hdl.handle.net/10114/00019288</a>

小原さんの業績を一冊にする話は、その後出ないではなかったが、戦後の混乱にまぎれ、社そのものも斜陽の浮目で実現しなかった。

それから十数年にわたって、何回も小原さんと逢うことになったが、そのたびに、栄進されて、ついに教授になれるのだが、ぼくはどうも、初対面の印象があざやかで、学生の小原さんのイメージが消えないで困った。

小原さんも、ぼくを見ると「いやなオヤジだ」とおもわれたにちがいない。学生のとぎのまま応答されるのがつねだった。

疎遠になったばかりにも、小原さんの学界で、国際的にもはなばなしく活躍されているのはきこえていた。その、これからというとき、なくなられた。十歳ぐらい年上のぼくなどがまだ生きているのに、というおもいがしきりである。小原さんも、心のこりであられたろう。

豪傑笑いをされる小原さんの声が今でもこびりついている。

## 小原先生の想い出

——酒と旅と「江戸っ子」

山田道弘

日文科の研究室をかりて近代文学研究会が発足したのは一九五三年の春だったと思う。当時助手だった小原先生にご指導をお願いして、二年生十人程で始めたこの研究会は卒業まで続いた。この研究会を通じて先生と学生たちとの関係は急速に親密になっていったが、とくに私たち仲間は遠慮がなかったようだ。

ある時、先生が「君たち私用電話、少し控え目にしてくれませんか」と、先生独特の小さく息を呼吸しながら、その時咽の奥を鳴らすような笑い声を立て、済なそうにテレたような顔でいわれた。学生のタマリ場となっていた研究室の電話は、朝から晩まで学生たちの話し声で絶え間がなかった。通話料は相当なものだったろう。学校側から幾度か管理責任者の先生のもとへ苦情が持ち込まれていた。結局一年程後に取りはずされてしまったが、先生の困惑をよそに学生たちは、この無料で便利な電話を愛用し続けた。先生のこうした態度は一貫していたように思うが、かえって学生たちの方が無遠慮で、今思えば生意気で身勝手だった。

浅草の小さな小屋へ安来節を見に行ったことがある。近藤（忠義）先生も行かれたということで、話題の一つにでもというつもりだった。先生はこういうことに大変興味をみせられた。湧々する物見高い好奇心が躍動していた。目的へ性急に一直線に向っていった。面白おかしい泥鰌掬いの踊り——、徹底した道化振りの中に、見終ったものを物悲しさに誘い込むものがある。安来節見学の理由と感想だったと思う。しかし、この後何度かやった「文学散歩」などでも、改めて論じ批評することはなかった。長塚節の生家、「田舎教師」（田山花袋）の墓等、その都度それぞれが感想を口走っていた。

旅行と酒は先生にとって潤滑油のような生活の一部だった。毎年度は京都へ行かれたが、私たちも一泊の小旅行で、伊豆大島、塩原須巻、甲府等へ出かけた。夜はきまって酒宴となった。翌朝は頭が割れるような宿酔をしたが、先生はそれが表面からは窺えなかった。且井（和幸）も酒には強かった。田中（実）もくずれることがなかったが、私はある量を過すと一度に酔いが回った。下戸の山本（哲也）はそれを心配そうに見ている。先生はたいていはいつもここにこしていられたが、酔いにまかせて手前勝手な「乱論乱争」に陥るとたしなめられることがあった。しかし泥酔の極にある私たちにほもう通じない。こんなことが度重なり、年月を経るにしたがって諦らめてしまわれたようだ。

酒にまつわる思い出は多い。ある日先生のお宅へお邪魔すると業界誌「酒」から原稿の依頼があり、謝礼はたしか特級酒三本だった

と思う。現品が置いてあった。「僕の酒も有名になったものだね」と、先生は苦笑されていたが、原稿を書かれたかどうか知らない。とにかくその夜はその酒には手をつけなかったように思う。

先生のお宅にしばしば伺った。というより襲ったという方が正確だろう。なにしろ大酒家が徒党を組んで深更まで飲み騒ぐことになるのだから。用意された酒で間に合うわけがない。奥さんが寝静まった道を酒屋へ自転車で行くことが再三再四あった。奥さんはその頃朝三時四時には起きられて、今という何かパートタイムの仕事をして、私たちが起き出すころには戻ってこられた。人形作りもされていたが、うとうとされながらも「乱論」や「酔談」を聞いておられた。しかし、家計の方にまで気を巡らすような殊勝なものはいなかった。「ゆうべの酒よりも、この前の方がよかった」など、全く気楽な極楽トンボではあった。

夕飯代の百円がもったいないと文庫本になった。山本とは歌舞伎、文楽、新劇などへよく行った。山本の演劇に対する知識は豊富でよく勉強していた。彼とは新宿の紀伊国屋書店へ行くのが日課になっていたことがあった。どうしてこんなに新刊の本ができるのかと思ったものだ。帰りのコーヒー代はたいがい彼が家庭教師で得た収入から払った。私は質屋通いの常習だったが、困り果て先生からお借りしたことがある。これには先生も困られたことだろう。

いろいろな体験や雑談の中から教えられ、考えさせられて行った。先生は「本を沢山読みなさい」といわれたが、ゼミや講義の時

とは違い、たまに質問することがあっても控え目に話し合うという態度のようだった。このことは、私が郷里に帰ってからときどきお会いする時も変らず続いていた。後になって理解されてきたが、先生の体質だったと思う。

御徒町の朝鮮料理店は最初先生に連れられて行った。朝鮮風の焼肉が今ほど一般的ではなく、料理化されていなかった。初めての人はニンニクの異臭、異様な肉片、唐辛子の辛さに食欲を失ってしまった。駒尺喜美、鈴木良子、吉沢敏子氏等を連れて行ったことがあったが、見るなり顔をしかめてしまった。金(達寿)さんと初めてお会いしたのもここだった。金さんが、センマイという鯨の皮のような牛の胃のナマを井いっぱい美味そうにペロッと食べてしまうのを見て驚いた。その時何をお話したのか憶えていないが、肉や魚の嫌いな私も朝鮮料理に自信が持てるように思ったものだ。

先生のお話で、金さんはその後吉祥寺で古本屋をやられたが、商品は友人知人を回って寄附されたもの。よく売れたが「何しろ売れたら全部儲けだと思って飲んでしまったものだから、すぐつぶれた」ということ。その前に私は何かの用事で、新宿・落合にあった金さんのお宅に伺ったことがある。岩波の「文学講座」に執筆されていて「先月は二十万円程収入がありました、すぐなくなっていました。減多にないのですが」といっておられた。金さんが芥川賞の受賞を拒絶されたのはそれから数年後のことである。

先生を通していろいろな人を知ったが、気取りがないので気楽だ

った。先生は小児のように駄々っ子の面があった。わずか三分後に着く電車が待てずタクシー乗り場に急ぐということがあった。新しい靴、ネクタイ、カメラ等何度も取り出しては眺めている姿が浮んでくる。

「僕は最後の江戸ッ子だ」といい、江戸ッ子であろうとされた。江戸ッ子は単純にして明解、情に脆いが威勢がよく「火事と喧嘩は江戸の華」という。このどこに矜持性があるというのか。私はよく先生とやり合った。

しかし、これは皮相な見方で、先生は失われ行く江戸の下町の情緒に限りない愛着と郷愁があったのだ。江戸には持ちたくても持てない「宵越しの銭」を、逆に自慢にする楽天的で計算のない生活がある。この中には人間に対する思いやり、連帯意識さえある。「東京」とは異質のもので、先生の江戸ッ子讃歌には、パターン化する山手風の東京の風俗に対する悲しみと憤りが裏腹にあったと思う。

低俗、軽佻浮薄といわれようが、そこには庶民の蠢きがある。風変りさを敢えて求める江戸下町の生活感覚が、かつて江戸庶民の生活と上方に対する反撥の中に共生し、発達してきたとしても、この江戸ッ子気質には共感できる。ただ、ツウだ、イキだ、イナセだといったことだけがその中から抽出され誇大に受け継がれている。

「この間とうとう四十八度の風呂に入ったよ」と嬉しそうにいわれたし「すしの握り方を知っているか」と訊かれたこともあった。珍らしいこと、新しいことに非常な興味をみせられたが、こうした

ことを話すことが、うれしくて楽しくて仕方がないという様子だった。「君に会ったらいおうと思っていたんだ」と、京都旅行の帰りなどに私の家に寄られた。

甲府へ旅行したとき、その費用を且井も私も何とか工面し、田中は目覚時計を質屋に置いてきた。先生の大学の同級生という人（名前を忘れた）が案内して、まず葡萄園に行ったが、葡萄狩りには誰れも興味を示さず、もっぱら椅子に腰をかけたまま白ワインの味に関心が集中していた。「小原は将棋を知っているでしょう。学生時代に入入りしていた質屋の親父に教えられたんです」とその友人が教えてくれたが、先生は勝負事などにまるで興味がなく、将棋を差すとは、初耳だ。「僕の本を下宿から持ち出して売ってしまったことがあったんですよ」というと、先生は「あれは吉川英治の『新平家物語』だった。あんなものを本棚に飾っておくなど恥だよ。あれだけがよく目立っていたからね」と、学生時代を思い出されながら話をしていた。

翌日の夕方新宿で解散したが、その夜先生が全身火傷で入院されたという。翌日になって学校で知ったのだが、重態だ、危篤だという怪情報が流れていた。それ程でもないと思ったので早速お見舞いをと私たちは相談の結果、ダブるものばかりだろうというわけで現金にしたところ、後になってその理由を訊ねられて返答につまってしまった。

「父親が胃癌で亡くなったんで僕もきつと胃癌になると思うが、

その時には特效薬ができているよ」といっていられたが、煙草もあまり吸わない先生が肺癌にかかり、二十数年経った現在も医学は癌に無抵抗だ。何の予告もなしにぶらりと伺うのが常の私だが、いつか先生の年賀状に「ぶらりとお出を待つ」とあった。いまでもぶらりと久喜のお宅へ伺えば先生がいつものように、きつと現れると思えて仕方がない。そしていつものように……。久喜へ行くのが恐いような気がする。

### 小原先生との日々

且井和幸

小原先生が亡くなられてから、早くも一年になろうとしている。塩谷氏から小原先生危篤の知らせを受け、それを追うように由井氏からの「小原先生死す」の電報をいただいたことが、まるで昨日のことのように想い出されてならない。まだ若々しく大へんお元気な先生しか想い出すことのできない私にとっては、先生の死が現実離れのしたいたずら事のように感じられてしかたがなかったものであ